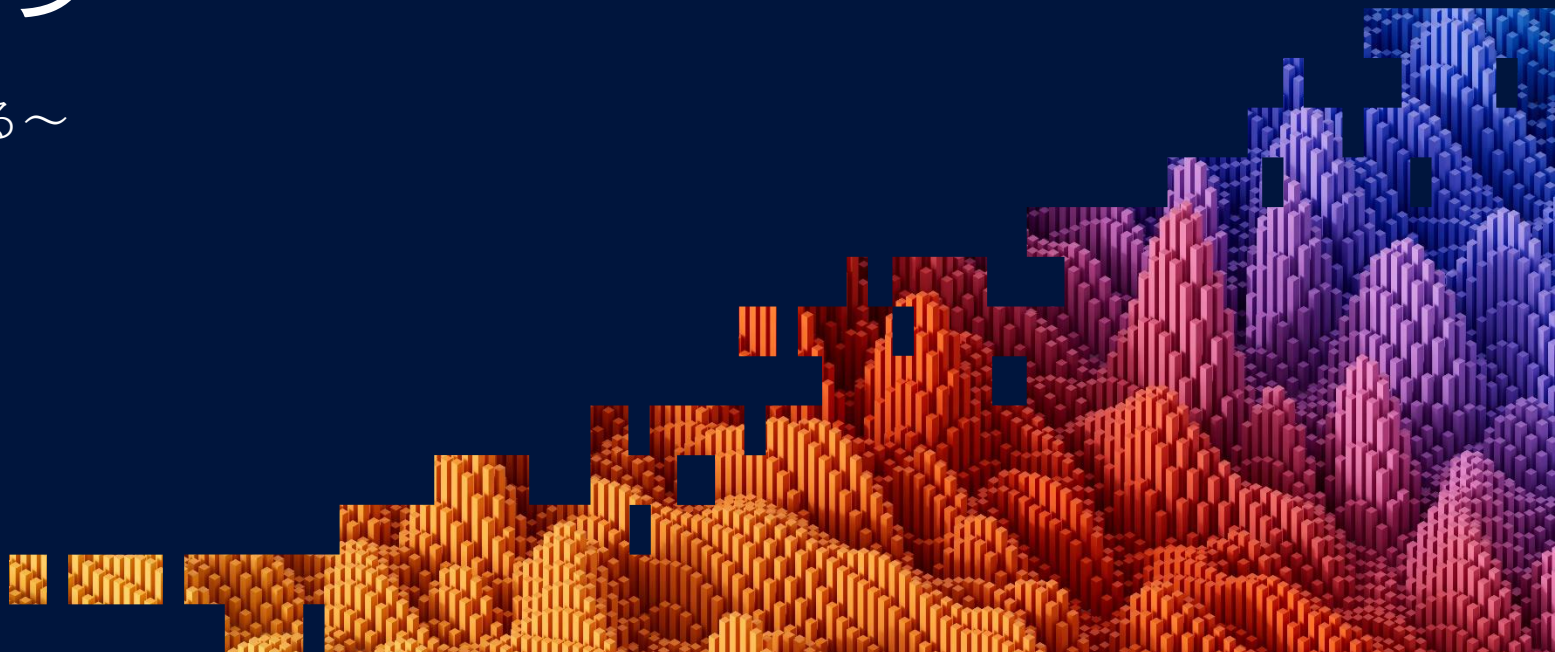


RSM汐留パートナーズ

内部監査DXの第一歩

～データ分析で監査はこう変わる～

2026年1月



背景と課題



内部監査に対する期待役割（1/2）

内部監査が機能していない企業に潜むリスク

- 内部監査が機能していない = コンプライアンス違反が横行している可能性が示唆される
- 帝国データバンクの調査によると、2024年度のコンプライアンス違反による倒産件数は379件と、過去最多を更新※1
- 違反内容の内訳で最も多いのは、「粉飾」（101件）
 - ▶ コロナ禍における「ゼロゼロ融資」などの支援を受けるため、業績を水増し申告するケースが発生
 - ▶ 融資の返済開始のタイミングで不正が発覚する事例が近年増加

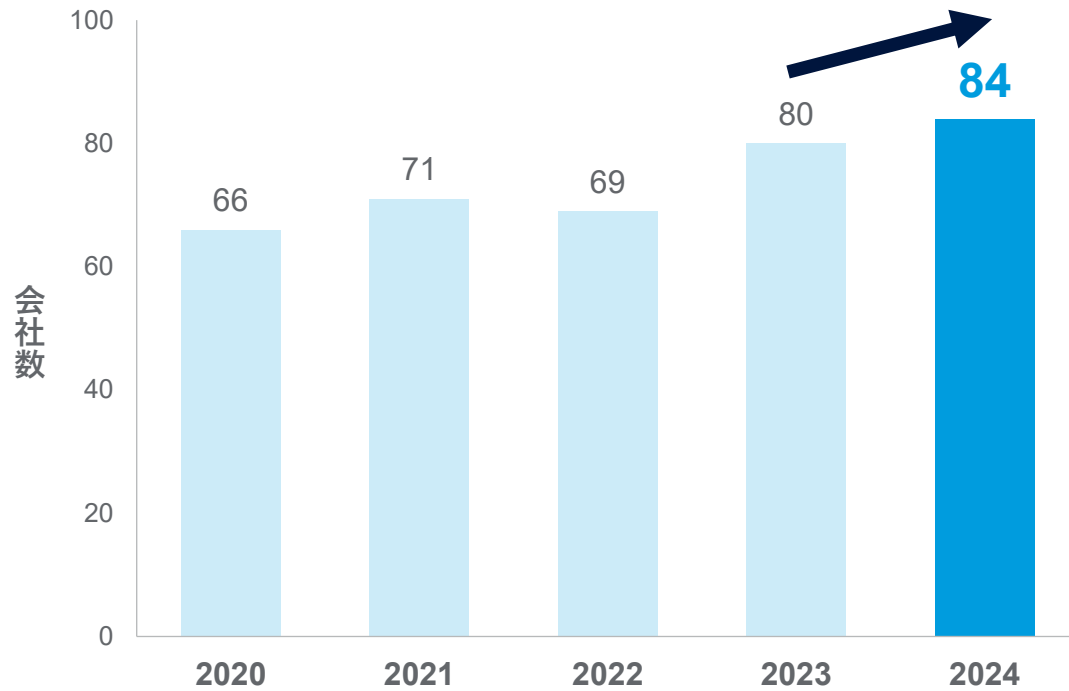


- コンプライアンス違反は、最初は小さな出来心から始まる場合が多い
- しかし、社内での牽制力・抑止力が機能してなければ、瞬く間に取り返しのつかない事態となるケースが多い
- 最悪のケース（倒産）に繋がった場合、金融機関や株主をはじめ多数のステークホルダーへ与える影響は計り知れない

※1 帝国データバンク：コンプライアンス違反企業の倒産動向調査（2024年度）（<https://www.tdb.co.jp/report/economic/20250415-compliance/>）

内部監査に対する期待役割 (2/2)

不適切会計による第三者委員会報告書件数※2



不適切会計の摘発件数の増加からも、企業には一層の透明性と説明責任が求められている。

この流れの中で、**内部監査は単なるチェック機能にとどまらず、経営リスクを未然に防ぐ「防波堤」としての役割が強く期待される。**

近年、内部監査の高度化は企業価値を守るための必須条件となっている。

※2 第三者委員会ドットコム：年別公表データ ([第三者委員会ドットコム](#)) を当社にて加工

内部監査に求められる水準

金融庁にて求める内部監査の水準は、下記の通り公表されている。※3

過去／形式／部分		未来／実質／全体	
第一段階 (Ver.1.0)	第二段階 (Ver.2.0)	第三段階 (Ver.3.0)	第四段階 (Ver.4.0)
事務不備監査	リスクベース監査	経営監査	信頼されるアドバイザー
事務不備、規程違反等の発見を通じた各部門への牽制機能の発揮	リスクアセスメントに基づき、高リスク領域の業務プロセスに対する問題を提起	内外の環境変化等に対応した経営に資する保証を提供	保証やそれに伴う課題解決に留まらず、経営陣をはじめとする組織内の役職員に対し、経営戦略に資する助言を提供
第一段階として、主に形式的なチェックリスト等を用いた、社内業務チェック部門として役割が期待されている。日本企業の多くはこのレベルで留まっていることが多い。	第二段階に入ると、監査計画およびリスク評価を適切に実施しながら、高リスク領域へ監査資源を投入する必要がある。また、監査シナリオを練った上でテーマ監査を実施するといった中長期視点での監査も求められている。	第三、四段階にもなると、経営者の協力も不可欠になってくる領域になるが、企業の透明性が求められる中で、 監査を後ろ向きなものとして捉えるのではなく、将来の経営に役立つ示唆を見つけ出す機会としても利用して欲しいとの願いが込められている。	

※3 金融庁：金融機関の内部監査の高度化に向けたモニタリングレポート（2024）（[20240910.pdf](#)）

従来型内部監査の限界



属人性

- 特定メンバーの知見頼り、勘や経験に依存
- 客観的なデータの裏付けが少なく、職人技的になりがち
- メンバーの入れ替わり時の知見継承が困難



サンプリング中心

網羅性やリスクアプローチに
疑念がある

- 全量分析を行わず、サンプル証憑ベースでの監査となっている
- リソースの関係で、最もリスクの高い領域に踏み込めていない
- そもそもリスクの高い領域の識別が曖昧となっている



事後対応・静的監査

- 過去データ中心で指摘や異常事項の発見にタイムラグが生じてしまう
- リアルタイムでのリスク把握が出来ていない

内部監査DX

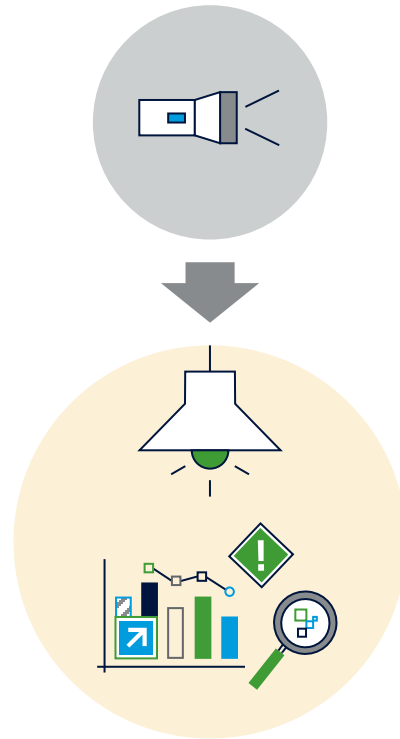


監査におけるDXとは

内部監査DXとは：

データとテクノロジーを活用し、監査の精度・効率・付加価値を高める取り組み

- 従来型監査は、暗闇の部屋の中で懐中電灯をもって特定の場所のみ（サンプルで選んだ箇所のみ）照らしている状態であり、光の当たっていない部分にリスクが潜んでいても判別できない※4
- データを利活用した内部監査DXでは、部屋のスイッチを押して「部屋全体の明かりを点ける」ことで、これまで見えていなかった部屋全体を確認し、異常値やリスク領域を把握する



<主な手法>

データ分析監査

（CAAT：Computer Assisted Audit Techniques）

会計・業務データを全量解析し、不正・異常値を抽出

継続的モニタリング

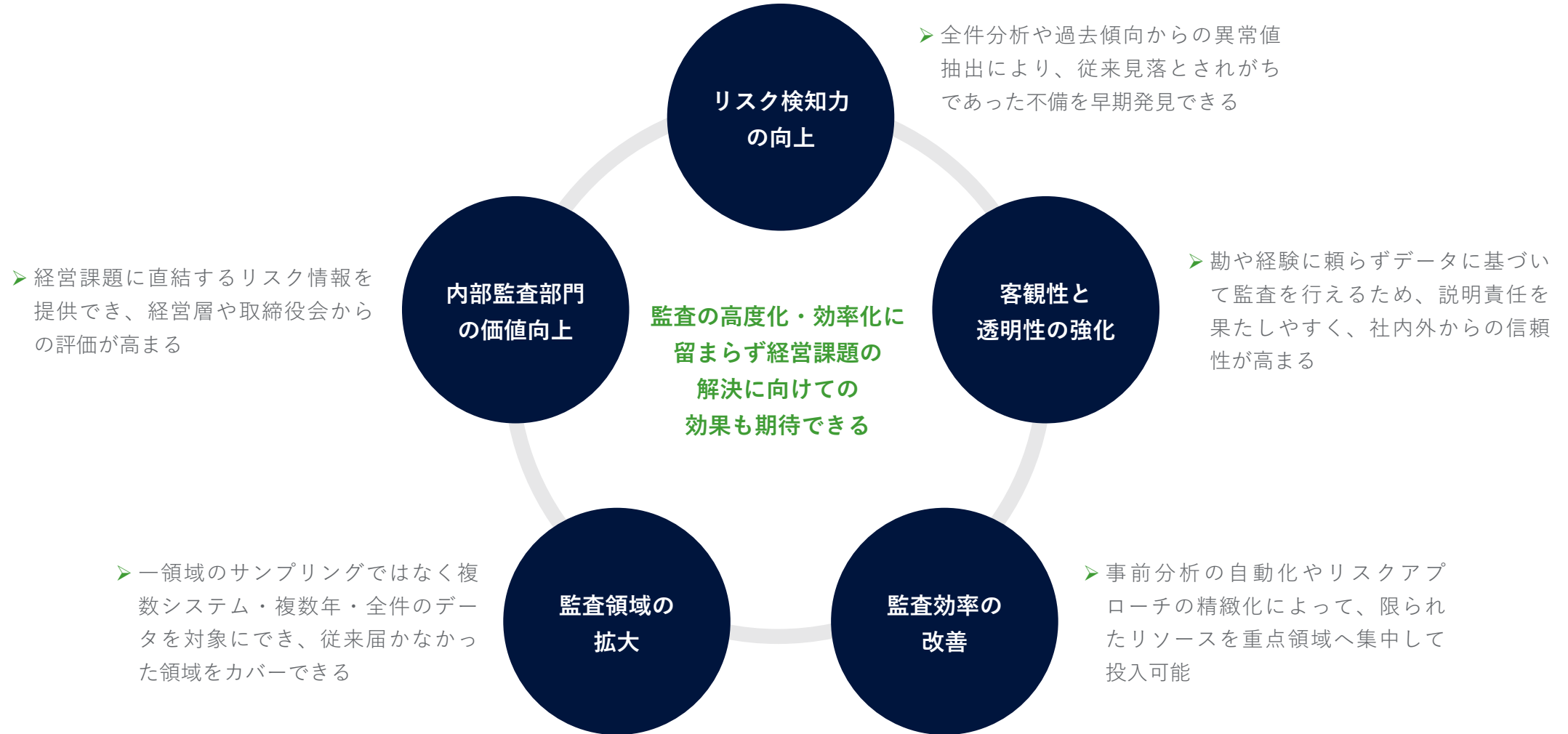
データを定期的に自動更新し、BIツール等でリアルタイムでリスク把握

生成AIの活用

紙ベースの証憑のデータ化、過去の不正事例を学習させナレッジ化など

※4 内部監査人協会（IIA）：Getting Started With: Data Analytics Basics ([Data Analytics Basics](#))

導入メリット



内部監査DXの流れ

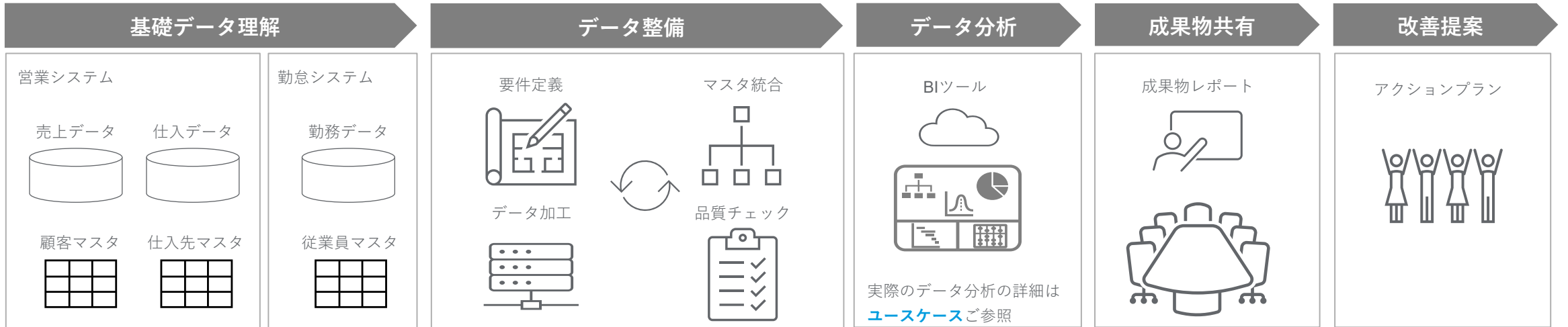
<よくあるお悩み>

- どのデータを、どの粒度で入手すればよいか分からない
- IT部門に何を依頼すればよいか整理できていない
- データ分析の成果物からどう改善していけばよいか分からない



RSM汐留パートナーズなら

データ整備から改善提案までをワンストップでご提供



DXの前工程：
改善ポイントの洗出しを実施

- 実務部門へのヒアリング
- IT部門との橋渡し
- 各種システム間のデータ連携構造の把握

利活用データの整理：
データ分析の基盤作成

- 要件整理、必要データの取捨選択
- マスターデータマネジメント (MDM)
- 欠損データの補完

データ分析の実施～改善アクション：
分析結果から得たインサイトを元に業務改善提案

- 重点リスクの洗い出し
- 是正対応方針の策定
- 改善アクションへの落とし込み

ユースケース



データ分析 (1/3)

ユースケース	拠点別財務指標リスクモニタリング
課題	監査対象が複数拠点（子会社や支社）あり、各拠点の状況を全体的に把握できない
データ分析でのアプローチ	財務数値や指標の時系列分析・異常値検知
期待効果	潜在リスクの早期発見、報告効率向上

- まずは、どの拠点でどのようなリスクが高まっているのかを財務諸表や試算表ベースで推移を分析し、異常な兆候が無いかを把握する

実用例

- 異常な傾向を財務指標の増減率や、過去からの全体の変動傾向と比較するシナリオを作成
- 該当シナリオに当てはまる拠点にリスクスコアを付与し、スコア合計値の高まっている拠点を選別する

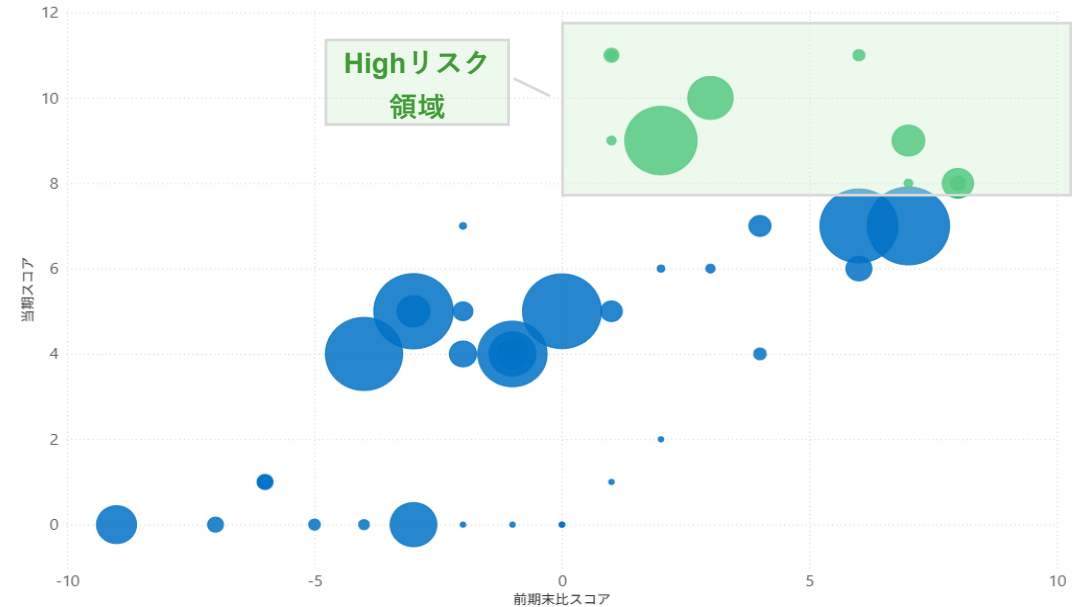


リスクシナリオ

シナリオ	シナリオ名称	シナリオ内容.1	スコア重みづけ	パラメータ1	パラメータ2	パラメータ3
シナリオ1	売上債権の回収滞留リスク	売上債権回転期間が前期末比で〇〇%増加	3	20%		
シナリオ2	仕入債務の返済滞留リスク	仕入債務回転期間が前期末比で〇〇%増加	1	20%		
シナリオ3	異常な粗利率	マイナスor100%超の粗利率	2			
シナリオ4	異常な粗利率の増加	粗利率が前年同期比で〇〇%増加	4	20%		

リスクスコアリング

バブルの大きさ=スコア年度の売上高



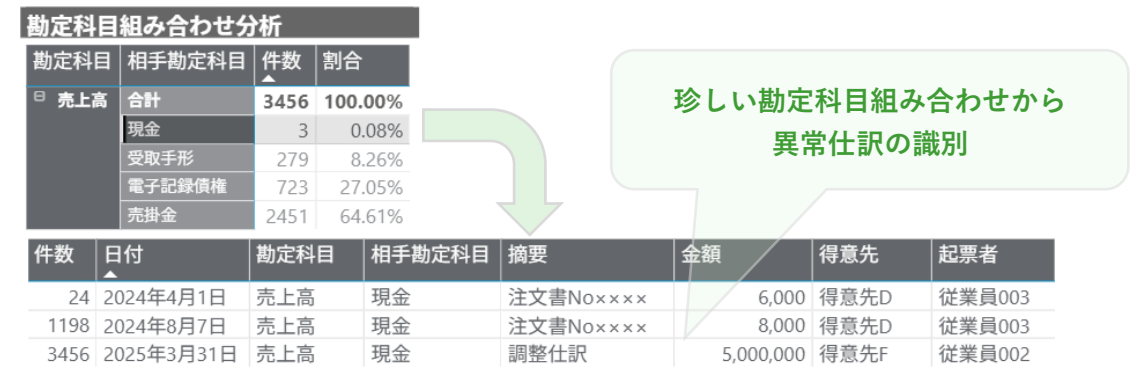
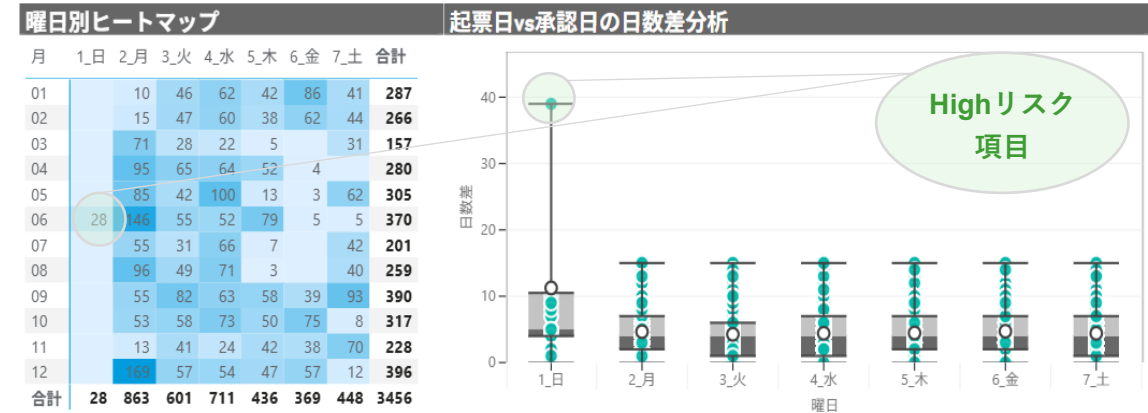
データ分析 (2/3)

ユースケース	仕訳データ分析による不自然取引抽出
課題	仕訳の誤計上や意図的な経費利用などの異常仕訳を発見したい
データ分析でのアプローチ	金額・勘定科目・日付などの異常パターン抽出
期待効果	不正リスク低減、内部統制強化

- ▶ 仕訳データを用いて、勘定科目ごとに起票される仕訳の特徴や起票者/承認者別の仕訳件数やパターンを分析し、異常な傾向が無いかを把握する

実用例

- ▶ 仕訳の起票日や承認日のパターンを分析し、異常な兆候や、通常想定されないパターンでの仕訳が無いかを探る
- ▶ 勘定科目の組み合わせ分析を行い、珍しいパターンで起票されている仕訳を抽出する



データ分析（データ分析 3/3）

ユースケース	詳細データ異常検知
課題	売上の架空計上やカットオフエラーを見逃してしまう
データ分析でのアプローチ	月次/週次売上の時系列分析・閾値外検知
期待効果	異常売上の早期発見、意思決定支援

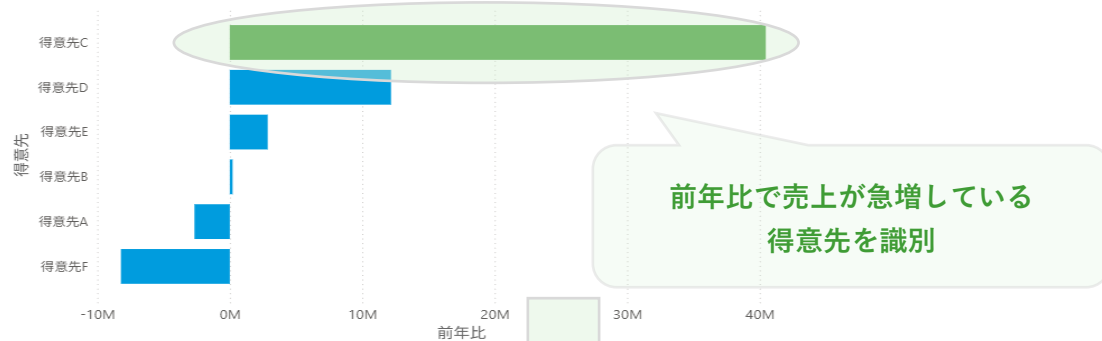
- ▶ 各種トランザクションデータでは、最も詳細な粒度でデータ取得が可能であることから、業界特有の処理や慣習といった個別事情も考慮したうえで、業務上のリスクに該当する異常値をピンポイントで抽出する

実用例

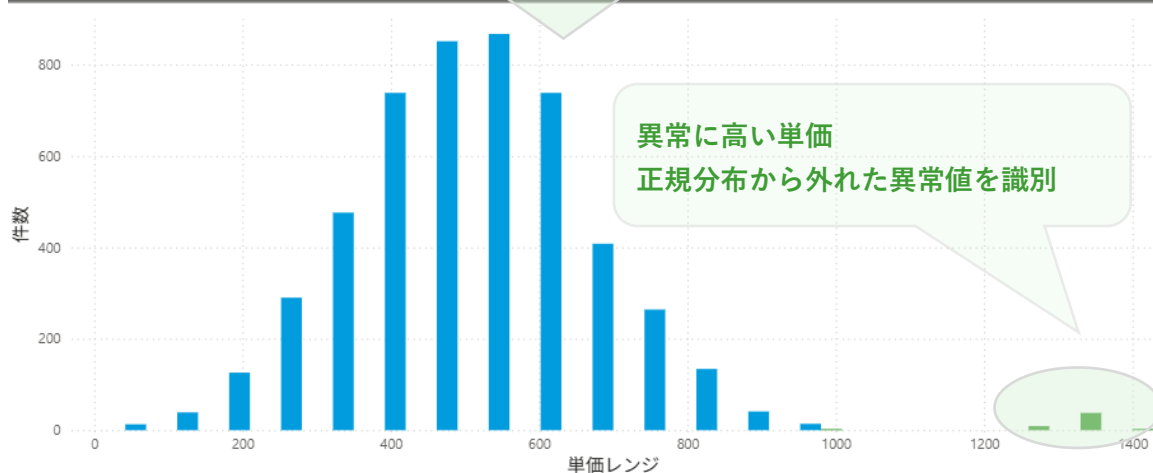
- ▶ 得意先別や売上担当者別に集計し、過年度比で急激に変化のある取引はないかを把握する
- ▶ 単価と数量に分解し、それぞれ統計的に外れ値に位置する値が無いかを分析する



得意先別増減分析



売上単価ヒストグラム



Q&A



導入STEP全体像



導入STEP 1 : PoC

主な活動

テーマの絞り込み

- 小規模・効果測定がしやすい領域を選定
(例：旅費精算、売上計上、仕入・支払など)

データ収集・前処理

- 会計／業務データを抽出し、分析に使える形に整備

試行的なデータ分析

- データの全体像の理解
- 不正・誤謬を検知するための切り口を探索

よくあるQ&A

Q どのようなデータが分析に適しているのかわからない。

基本的にはExcelやCSV形式のデータが適していますが、PDFやその他形式のデータからの加工実績もございますので、お気軽にご相談ください。

Q データが整備されておらず、分析できるか不安です。

PoCの段階では、完全に整備されたデータでなくても問題ございません。データクレンジングや前処理も含めてサポートいたします。

Q PoCにどれくらいの期間がかかりますか？

対象テーマやデータ量、弊社リソースにもよりますが、通常はデータ入手から**1か月**程度で結果をご提示できるケースが多いです。

導入STEP 2：本格導入

主な活動

インフラ整備

- ビジューアライズ化のためBIツールや共通データ基盤を構築

分析手法・ルールの標準化

- PoCで有効であった切り口や異常検知ロジックを元にデータ分析を実施

分析データの整合性検証・品質管理チェック

- 元データや各データ同士の結合の整合性を確認
- データ分析が適正に行われているかの品質チェックを実施

分析結果のフィードバック

- 分析で得られたインサイトを関係者へ共有
- 次アクションのリコmendを実施

よくあるQ&A

Q 社内にBIツールの知見がなくても大丈夫ですか？

ご安心ください。弊社にてBIツールの実装は行わせていただきます。また、状況によって操作教育までサポート可能です。監査メンバーが自走できるようにトレーニングもご提供します。

Q PoCで使った分析手法をそのまま使えますか？

はい。PoCで効果があった切り口やロジックをベースに分析作業は進めてまいります。なお、場合によってはPoCと本格導入は同一フェーズで実装することもございます。

Q 分析結果をどう活かせばよいか分かりません。

弊社の分析結果のフィードバックは「単なる異常の発見」に留まらず、必要に応じて、改善の優先順位づけや監査計画への反映までリコmendいたします。

導入STEP 3：運用・高度化

主な活動

継続的モニタリングの導入

- ・ 毎月／四半期/年次ベースで定型分析を自動・半自動で実行
- ・ 一度きりではなく、監査サイクルに継続的に組み込む

分析内容のアップデート

- ・ 新規リスクや業務変更に合わせてチェックルールを見直し
- ・ 分析の切り口や指標をアップデートし精度向上

ダッシュボード活用・共有

- ・ ダッシュボードを経営層とも共有し、リアルタイムで状況を把握

人材育成・自走支援

- ・ 自社で分析を継続できるよう教育・トレーニングを提供
- ・ データ活用人材の育成のため、長期的な内製化を支援

よくあるQ&A

Q 納品された分析をそのまま使い続けられますか？

はい。ただし分析対象のデータは日々更新されていくため、定期的には数値更新をすることをお勧めいたします。また、その際分析で利用した元データと同じ構成であれば、自動更新も可能です。

Q 新しいリスクにどう対応すればよいですか？

業務変更や不正手口の変化に応じ、分析ロジックを随時改訂します。監査テーマや重点領域の見直しもサポートします。

Q 将来的に監査対象やデータ量が増えても対応できますか？

はい。部門間への横展開や子会社への縦展開など、分析対象の拡大にも柔軟に対応可能です。必要に応じて分析ルールやフローも調整できます。

内部監査DXの第一歩：

まずは一部データから始めることが 内部監査DXの鍵

- 高度なテクニックやツールは不要で、身近にあるExcelからでも対応可能
- 小規模なPoCで成果を確認 → 成功事例をベースに本格導入へ
- 一歩ずつ段階的に導入することが、DX定着の地盤
- 導入効果として、高度化／効率化を実現
- その先にある内部監査部門の価値向上にも挑戦

<当社HPリンク先>

➤ サービス紹介

[内部監査DX支援](#)

[管理会計・経営レポートDX支援](#)

➤ BIツールデモ

[Power BI デモ](#)

<お問い合わせ先>

内部監査DXサービス説明資料の
ダウンロードはこちらから
<https://shiodome.co.jp/services/advistory/internal-audit/dx/resume-download/>

